



# NEWSLETTER

INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENTAL COMMITTEE FOUNDATION

財団法人 国際湖沼環境委員会

このニュースレターには英語版もあります。

## SIL アフリカ大湖沼専門家会議 アフリカ大湖沼の資源利用と保全に関するシンポジウム

国際陸水学会(SIL)のアフリカ大湖沼に関する専門家会議が、タンガニーカ湖の北東端にあたるブルンジ共和国の首都、ブジュンブラにおいて、1989年11月29日から12月2日にかけて開かれた。

この会議は1987年2月、ニュージーランドのハミルトンで開かれたSIL総会において当初、1987年末から1988年上旬に開催すべく提案されたが、諸々の事情によって何度かの延期を余儀なくされていたものである。このため、当初の開催者である英国のローズマリー・ロウエマッコネルは、オランダのフリッツC.ローストと交替した。

「アフリカ大湖沼の資源利用と保全」のタイトルのもとに開かれたこの会議には、オーストリア、ベルギー、ブルンジ、カナダ、チャド、フィンランド、フランス、イタリア、日本、ケニア、マラウイ、モザンビーク、オランダ、ニュージーランド、ナイジェリア、ルワンダ、タンザニア、ウガンダ、英国、米国、ザイール、ザンビア、ジンバブエ23カ国から100名を超える科学者、行政担当者、政府の意思決定権者が参加した。

期間中、朝8時から深夜19時40分にいたるまで連日の発表と討議が行われた。開会式はブルンジ政府の諸大臣およびブルンジ国立大学学長の臨席を得て、ブルンジのG.タキマジ氏による全体の趣旨と目的説明によって始まった。午前、午後には以下の5つの分科会が開かれた。養殖と漁業、科学的価値、水、石油、観光。夜はより親密な雰囲気の中で、タンガニーカ湖の漁業、キブ湖の漁業、沿岸漁業、保全と管理、ビクトリア湖の漁業、マラウィ(ニアサ)湖とウガンダの漁業、水質、および科学的価値について8つの分科会が開かれ、発表と討議がなされた。

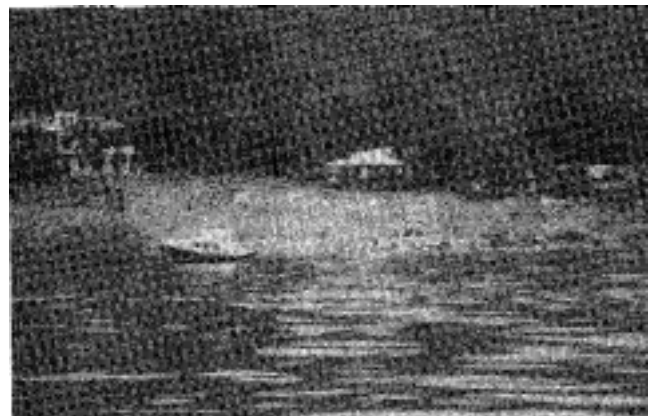
アフリカ大湖沼が科学的に極めて重要であり、汚染に対してたいへん脆弱であることが、全ての参加者によって強調され、再確認された。

養殖漁業については熱のこもった議論がなされた。例えば、ビクトリア湖では外来のティラピア科の魚と魚食性の魚であ

るナイル・パーチを導入したところ、在来種、とりわけ固有種であるハプロクロミー科の魚に大きな被害が生じている。この事態はたいへん深刻であり、この10年間でビクトリア湖の湖岸全域において、在来種がほとんど姿を消してしまったほどである。しかしながら、公式の漁業統計によれば、現在の漁獲高は過去何年間のそれと比べて数倍になっている。こうしたことから、生物学者や一部の水産学者はどのような水域であれ、将来的に外来種を導入して養殖することに警戒的であったが、他方、水産研究者の中には、タンパク資源の増加を図るために、他のアフリカ湖沼にそうした種を持ち込むことに強く賛成する意見もあった。これに関して、会議におけるある参加者のビクトリア湖の現状にかかる次のようなコメントは、とりわけ注目に値する。

「昔は、地元の人であればだれでも、在来の小型の魚を自分で捕えることができた。しかし、外来種のティラピアやナイル・パーチは普通の漁師が捕るには大きすぎる一方、地元の人が買うには高すぎる値がついている。」

もしこうした状況が他の多くの地域にもあてはまるのであれば、公式統計とは逆に、地元民が湖の魚から得るタンパク質の量は、驚くほど減少しているはずであり、事態はいっそ



タンガニーカ湖の北西端、ウビラにおける湖岸およびCRSNウビラ実験所

1988年4月23日 遊磨正秀氏撮影

う悪くなっているといえる。最後に、全ての参加者は、このような養殖を行う前に、自然科学的および社会科学的視点からの念入りなアセスメントが必要であるという点で意見の一致をみた。

もう一つの重要な論点は原油による汚染であった。現在、いくつかの石油会社が、タンガニーカ湖およびマラウィ(ニアサ)湖の湖底で試掘を行う許可を得ようと試みている。ナイジェリアおよび世界の他の地域における原油汚染の実例が示され、全ての参加者は、これら水深が深く、生態的に脆弱な湖で、こうした汚染がいったん発生すれば、破局的な結果をひ

きおこすであろうことに、格別の憂慮を表明した。

会議の最終日には2つのエクスカージョンが行なわれた。一つはナイル川源流の訪問およびブルンジ観光であり、他の一つはザイルの国立自然科学研究センター(CRSN)ウビラ実験所(以前はIRSAC-Uviraと呼ばれていた)の視察であった。この実験所においては、タンガニーカ湖の生態学と陸水学について、ザイルと日本の研究者間で重要な共同研究が1979年以来行なわれており、既に300以上の論文と報告書となって出版されている。このことについて参加者の中から格別の関心と賞賛の声がよせられていた。

## 第4回世界湖沼会議「杭州'90」

1990年9月5~10日の間、中国杭州市において、湖沼の保全と管理に関して2年ごとに開催されている世界湖沼会議が、中国環境科学研究院と国際湖沼環境委員会(ILEC)を始めとするいくつかの機関の共催によって、開催される予定である。

この会議は、1984年の琵琶湖湖畔(日本)、1986年のヒューロン湖湖畔(アメリカ)、1988年のパラトン湖湖畔(ハンガリー)で開催された会議に続くもので、これらの会議にならない、杭州190の会議も湖沼の保全と管理に関して幅広く問題点を提示することとしている。

これまでの会議の慣例に従い、参加者は、開催地の湖沼とその周辺の地域文化を満喫することができる。杭州市では、その湖は「西湖」である。「西湖」は英語でも単に、West Lakeと訳されているが、2000年以上にわたって、杭州市のシンボルであった。申国に、「上有天堂、下有蘇杭(天に極楽あれば、地に蘇州・杭州あり)」ということわざがあるように、西湖の碧い水と周囲の緑の丘、その魅力的な光景から、地上の楽園という評判を得ている。

会議の主要なテーマは、以下に示すとおりであるが、どれかに関係する論文を発表したい場合タイプで打った要約(500語まで)を1990年4月30日までに準備委員会事務局まで送付されたい。会議の報告書は、1990年10月20日までに発表者から最終原稿を得て、会議後、数ヶ月以内に翻訳し、発行する予定である。

### 会場

杭州シャングリラホテル(杭州市北山路78号)

電話 開催中 :0571-22921

開催前後:4022542 北京

### 主要テーマ

#### 1. 課題 共通認識とケーススタディ

- a) 沈泥化、酸性化、富栄養化、毒物汚染、その他健康に

#### 関する諸問題

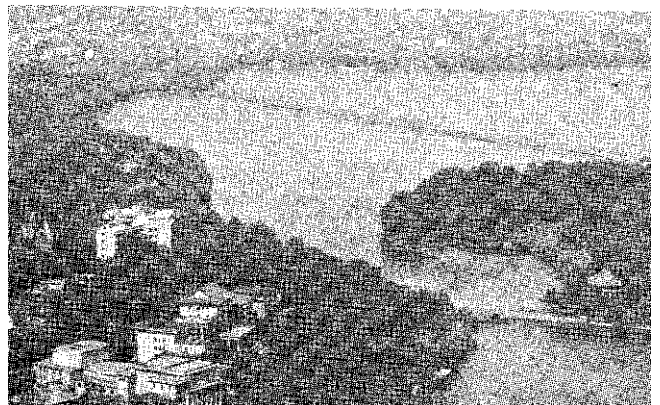
- b) 水生生物共同体と湿地帯の役割と保護
  - c) 湖の異なる利用間の共存
2. 湖沼と湖沼流域の持続的管理
- a) 汚染源の管理のための戦略
  - b) 最適技術の選択
  - c) 資源経済
  - d) モデリングと計画
  - e) 制度上、法律上の局面
3. 湖沼管理における地域・国・国際機関、科学者、市民の相互関係に関する特別会議
- a) 行政機関に関して(国際水資源学会後援)
  - b) 市民と環境教育の役割に関して(国際湖沼環境委員会後援)

#### 共催と支援団体(予定)

中国環境保護庁、中国環境科学研究院、(財)国際湖沼環境委員会、国連環境計画国際水資源学会、国際応用理論陸水学会、国際水質汚濁学会、浙江省環境保護局、杭州市環境保護局、南京地理・湖沼研究所

#### 使用言語

会議の公式用語は、英語と中国語です。英語と中国語の



同時通訳をします。

### プログラム(案)

- 9月4日 午前 参加者の到着  
午後 登録
- 9月5日 午前 開会式(司会 劉 鴻亮 教授)  
基調講演中国環境保護庁長官 曲 格平  
国連環境計画事務局長 M.K トルバ  
浙江省知事代理 チャイ・ソンユエ  
杭州市市長代理 Xiu・ユンホウ  
国際湖沼環境委員会 吉良龍夫  
招待者講演  
午後 セッション 通認識とケーススタディ、酸性化  
セッション II 沈泥化、毒物汚染、健康問題  
夜 歓迎会
- 9月6日 午前 セッション I 行政機関に関して(国際水 資源学会後援)  
セッション II 汚染源の管理のための戦略  
午後 セッション 水生生物共同体と湿地帯の役割と保護  
セッション II 最適技術の選択
- 9月7日 午前 視察  
午後 晩餐会
- 9月8日 午前 セッション I 湖の異なる利用間の共存  
セッション II 資源経済  
午後 セッション モデリングと計画  
セッション II 富栄養化
- 9月9日 午前 セッション I 制度上、法律上の局面  
セッション II 市民と環境教育の役割に関して(国際湖沼環境委員会後援)  
午後 閉会式  
各セッション司会者による報告  
次回会議の主催者による講演  
閉会の挨拶  
夜 さよならパーティ

### お知らせ

#### 1. 中国への入国

事務局では、中国環境保護庁が発行する公式の招待状を送付するので、大使館や領事館で入国ビザの申請の際に御利用下さい。

#### 2. ホテルの予約

ホテルは、シングルで16~80USドル、ツインで一人につ

き 27.5~45US ドルのホテルが予約できますが、予約金が100USドル必要です。

#### 3. 一般行事

会議の登録者は、無料で、観光施行(1日)、歓迎レセプション、さよならパーティーに参加できます。また、一人20USドルで、西湖の小さな島で開かれるダンスと民俗芸術のショーを盛り込んだ晩餐会 杭州夜会 に出席できます。

#### 4. 同伴者のためのプログラム

一般行事の他に、霊隠寺、墳墓や寺院、下町の市場、六和塔、絹織物、竜井茶園へのツアーに参加できます。

#### 5. 会議終了後のツアー

会議終了後、希望者は、5~10日間のパッケージツアーに参加できます。費用は、1人の場合、736.89~1293.2USドル、2人の場合、1人につき625~1162.7USドル必要です。杭州インターナショナル・コンベンション・センターで準備しており、全額前払いです。

#### 6. 会議の登録料

	参加者	学生	同伴者
1990年4月30日までの登録者	250	125	125
1990年5月1日以降の登録者	300	150	150

(USドル)

登録書の様式、会議に関する詳細な事項、会議終了後のツアー等については、事務局までお尋ねください。

連絡先：“杭州'90”準備委員会事務局 Mr. Zhang Yutian  
中国環境科学研究院 外務室  
中華人民共和国、北京、(100012 Beiyuan, Anwai)  
電話:4022542 電報:1064  
テレックス:210364 CRAES CN

Contact: Mr. Zhang Yutian  
Secretariat of Preparation Committee, "Hangzhou '90"  
Foreign Affairs Office  
Chinese Research Academy of Environmental Sciences  
100012 Beiyuan, Anwai  
Beijing, The People's Republic of China  
Telephone: 4022542 Cable: 1064  
Telex: 210364 CRAES CN

発表原稿の要約、登録、ホテルの予約、会議後のツアーの予約の締め切りはすべて1990年4月30日です。



## 生態学シンポジウム開催される

「あすの生態学を求めて」をテーマに、昨年 11 月 2 日から 3 日間、大津市打出浜の琵琶湖研究所で「生態学シンポジウム」が開かれた。

このシンポジウムは、近年の社会・経済変化により人間や生物の環境が急速に変化しその影響が地球的規模にまで及び、我々の生活の物質的・精神的両面で重大な様相を帯びつつある現在、広く重要性が認識されるにいたった生態学研究について、その成果と今後の展望を探ろうと企画されたもの。

琵琶湖の水質浄化を軸に環境問題に努力を重ね、国立生態学研究所の誘致など生態学研究の分野にも深い関心を払ってきた滋賀県が「滋賀県琵琶湖の富栄養化の防止に関する条例」の施行 10 周年を兼ねて、本シンポジウムを提案し、日本生態学会、国際生態学会の共催と国際湖沼環境委員会の後援を得た。地方自治体と生態学会が共同でこの種のシンポジウムを主催するのは初の試みである。

本年 8 月横浜市においてアジアで初めて開催される「国際生態学会議」のプレ・シンポジウムとして位置づけられた本シンポジウムには、7 か国 10 人の外国人の講師、討論者を含め、学会関係者、行政関係者を中心に約 150 名が参加した。

稲葉滋賀県知事、川郡部日本生態学会会長、ゴーリー国際生態学会会長のあいさつの後、2 日間にわたって、基礎研究や社会参加、研究と行政の連携などのテーマに沿って各講師からの講演と討論が繰り広げられた。特に、生態学あるいは生態学者が地域開発問題に果たす役割についても熱心な討論が行われ、情報を提供する生態学者と政策を実行する行政との関わりについての指摘があった。

3 日目は、琵琶湖南湖一帯のエクスカージョン。船上から琵琶湖の水質、湖岸の景観などの視察を行い、シンポジウムの幕を閉じた。

### 生態学シンポジウム あすの生態学を求めて (Ecology for tomorrow) プログラム

日程	プログラム	講演者	国	所属等	テーマ
11 月 2 日 (木)	講演 1	ジョン M. チェレット	英国	ノースウェールズ大学生物学教室教授	自然界の理解に対する生態学の貢献 : いくつかの基本概念について
	講演 2	グレゴリー J. ヒンクル	米国	マサチューセッツ大学植物学教室	共生とガイア仮説
	講演 3	ジョン A. エンドラー	米国	カリフォルニア大学(サンタバーバラ)生物科学教室教授	生態学と自然選択
	講演 4	山岡亮平	日本	京都工芸繊維大学繊維学部助教授	生物間相互作用解明の化学的アプローチ
	討論	ポール F. メイコック 川那部 浩哉	カナダ 日本	トロント大学植物学教室教授 国際生態学会事務局長 京都大学理学部教授 日本生態学会会長	第 1 日の内容中心のディスカッション
11 月 3 日 (金)	講演 1	及川武久	日本	筑波大学生物科学系助教授	植物群落の一次生産のモデル化
	講演 2	ウオルフガングハーバー	西独	ミュンヘン工学大学 景観生態学講座教授	景観生態学の基本概念と土地管理への応用
	講演 3	ホセ G. ツンディシ	ブラジル	サンパウロ大学(サンカルロス)工学部教授	生態学と開発: より良い社会への展望
	講演 4	ゴードン H. オリアンズ	米国	ワシントン大学動物学教室 および環境科学研究所教授	生態学と保全生物学: 相補的科学的な重要性
	総合討論	フランク B. ゴーリー 沼田真	米国 日本	ジョージア大学生態学研究所教授 国際生態学会会長 千葉県立中央博物館長	
11 月 4 日 (土)	エクスカージョン	琵琶湖南湖一帯			

## WMO 水理情報検索サービス 世界気象機関の INFOHYDRO

世界気象機関(WMO)の「陸水学および水資源計画(HWRP)」の 3 つからなる計画の 1 つ、応用陸水学計画(OHP)の主要な長期計画の 1 つの目的は、どのような機関が、どのような水理に関わる仕事を行っているかについて、情報の交

換を促進することである。この計画の実施については、主として WMO 事務局が担当しており、加盟国および他の利用者へのサービスとして展開されている。

INFOHYDRO は、次に掲げる情報の普及のためのサービス

である。

- (a) 水理学を取り扱う国、国際機関(政府間または非政府)、研究所などのリスト
- (b) (a)で列挙された団体で実施されている水理学関連の活動
- (c) 世界の主要な河川と湖沼流域
- (d) 各国の水理学関係測定局のネットワーク 局数と過去の測定期間
- (e) 国の水理学関係データバンク 収集状況、データの加工処理と保管蓄積

INFOHYDRO は、実際の水理学データそのものを取り扱ったり、収録するものではなく、また各国の検索システムをそのまま取り込むものではない。それは、最新の水理学的情報を迅速に加盟国に普及させるよう企図されたもので、国、とりわけこのサービスは、応用水理学を取り扱う国、地域あるいは国際機関の支援を要する水資源のアセスメント、開発および管理についての活動や計画に従事する専門家や機関あるいは企業に役立つようなねらいをもつ。INFOHYDRO によって利用できる情報は、加盟国における水資源アセスメント活動に関する示唆を与える。コンピュータ化されたサービスとして、INFOHYDRO は、徐々にオンラインシステム化

されることが予定されており、加盟国やその他の利用者が利用できるようになるであろう。

INFOHYDRO マニュアルは、INFOHYDRO において現在利用できるすべての水理学情報を含んでいる。マニュアルは、世界の国々の水理学上のサービスとそのデータ収集活動についての総合的な情報を 1 冊に包含している。WMO Operational Hydrology Report No. 28 (WMO - No. 683) として 1987 年に出版された INFOHYDRO マニュアル改定版の発行が準備されている。1990 年に発行予定の新版には、加盟国によって提供された情報に基づく最新データを含むことが予定されており、また各国ならびに国際的なデータバンクの中にどのような水理学関係のデータが含まれているかに関する新しい情報や Basic Hydrological Network Assessment Programme 計画(BNAP)のメンバーによって提供される情報を用いた基本的な水理学ネットワークに関する評価書もその中に含まれる予定である。加盟国、国際機関あるいは水資源と水理学上関わるすべての関係者は、INFOHYDRO を十分に活用していただきたい。

John C. Rodda

世界気象機関水利水資源部長

## 第 3 回世界湖沼会議 “ Balaton '88 ” 報告書の紹介 「湖沼の保全と管理」

J. サランキ S. ヘロディック編  
ハンガリー科学アカデミー、ブダペスト

この本は、ハンガリーのバラトン湖畔にあるケストヘイ市で開催された湖沼の保全と管理に関する第 3 回世界湖沼会議において、発表された 50 の講演の内容を収録したものである。

これらの内容は、富栄養化とその制御、酸性化と毒性物質による汚染、アフリカ・アジア・アメリカ・ヨーロッパなどにある世界の湖沼の保護、浅水域の管理、生態学・経済学・管理権などの問題が複合している場合の湖沼管理、湖沼管理のモデリングの 6 章に分かれている。さらに、編者の序文とゴルベフ博士の基調講演が目すべき内容となっている。

この本の最も大きな特徴は、少なくとも半数におよぶ数多くの東ヨーロッパからの発表である。目につくのは、ハンガリー、ソ連、ポーランドである。これら東ヨーロッパからの発表のなかには、例えば、ニメスラヤギテルソンらによる研究などいくつかの重要な発表がある。

残念なことは、興味ある討論の内容を収録できていないことであり、この中には会議では発表されなかった貴重な情報が含まれている。

また、621 頁以降には、索引付きで参加者全員の名簿が掲載されている。

全体として、新鮮で示唆に富んだ内容がかなりあり、大津(第 1 回会議)やミシガン(第 2 回会議)の報告書とはかなり異なっている。

最後に、著者の言葉を引用する。“環境保全と水資源管理に関して、学生だけでなく、陸水学者やその他の生態学者、専門家や政策決定者もこの本が最も有用であることを知るであろう。”

合田 健

摂南大学工学部教授



## 世界の湖沼

### ラドガ湖



ラドガ湖は、北半球で最も大きな湖の一つである。それは、ソ連のレニングラード地方とカレリア自治共和国にあり、ヨーロッパの北東部に位置している。湖の面積は、18,135km<sup>2</sup>を占め、水量は 908km<sup>3</sup> である。ラドガ湖の水位は、バルト海のそれより 4.8m 高い。ラドガ湖の平均水深は 51m であり、最大深は約 230m である。水位変動の年平均振幅は、69cm である。

ラドガ湖は、バルト海の楕状地とロシア台地の接合点にある。ラドガ湖の集水域は極めて広く、その面積は 25.06 万 km<sup>2</sup> である。その流域は、複雑な地質学上の歴史をもっている。流域の地質構造における差異は、そのくぼみ方と湖岸に現されている。北部および北西部の湖岸は、結晶性の岩石によって作られており、高く、かつ多くの切れ込みを持つ。他の湖岸は低い位置にあって、切れ込みは少なく、砂鉱や砂浜によって形成されているのが特徴である。

ラドガ湖の水温の特色は、水温層の存在である(春から夏の期間中)。それは、熱運動する区域と熱運動しない区域に分割する。この現象は、水中の化学的および生物学的なプロセスに影響を与える。

ラドガ湖の水は、軟水であり、平均無機物含有値は 62mg/L である。年平均の栄養塩類濃度は、次のとおりである。全リン 24mg/L、全窒素 0.6mg/L、珪素 0.2 - 0.5mg/L。湖の表層部分の溶存酸素量は 9 ~ 15mg/L の範囲で変動し、溶存酸素の飽和度の平均値は 80 ~ 120% である。

ラドガ湖の植物相と動物相は、いずれも豊富な種をもって

いる。現在、約 600 種の植物と 800 種以上の動物がみられる。この事実は、湖に相当多様な生物相が存在することを反映しており、植物層と動物層の研究に好適の場となっている。

植物プランクトン中の 400 以上の種と藻類に形態および差異が認められる。それらの中には、*Bacillariophyta*、*Cyanophyta* さらには *Chlorophyta* が多く存在する。22 種の藻類だけで最大 100 万個/L を越える。1976 年から 1988 年までの生物が活動できる季節の植物プランクトンの生産は、炭素換算で 44.9 ~ 54.5g/m<sup>2</sup> であり、年間の総生産は炭素換算 800 ~ 970 千トンに達した。

*phytoplankton* は 344 種あり、それらの中には、*Bacillariophyta* が 47%、*Chlorophyta* が 37% 含まれている。湖の各地域における生物量と *periphyton* の生産は、基層の性格により非常に異なる。全体にラドガ湖の有機物の中で *periphyton* の占める役割は取るに足りない。

現在まで 35 種の水生菌類がラドガ湖に発見されており、その中の圧倒的多数は、*Saprophytes* である。

高等水生植物の植物相には 62 種含まれており、その植物群落は 105km<sup>2</sup> の面積を占める。*Phytocoenoses of Phragmites australis*、*Scirpus lacustris* および *Potamogeton perfoliatus* が優勢である。年間の純生産は、炭素換算で総計 24.2 千トンになる。

北半球の温帯の水域に広く分布する湖に住む動物プランクトンの種(378 の種と亜種)が存在しており、それはラドガ湖の動物プランクトン層を構成している。極めて多様な *Rotatoria*



がみられ、その数もまた多い。1983年8月の動物プランクトンの平均生物量は、湖の地域により6.1~19.4g/m<sup>2</sup>までの値を示した。

ラドガ湖においては、408種の大型底生動物が明らかにされており、その大多数は湖岸の生物相に存在している。湖の深い部分の動物相は乏しい。底生動物の中で、重要な役割は、*relict Crustaceae*、特に *Poltporeia affinis* によって演じられており、それは魚類の重要な食物対象となっている。底生動物の生物量には、深い部分での0.1g/m<sup>2</sup>から波打ち際の細かい沈砂部分における6.0g/m<sup>2</sup>までの差異がみられた。ラドガ(湖)の *Meiobenthos* は重要性をもっており、その群落は水深の各層に多数存在している。すべての底生動物の生物量中の *Meiobenthos* 部分の割合は2%~70%にわたる。最大の生物量は、湖の南部の浅い部分で観測され、そこでは、それは1.2g/m<sup>2</sup>を超える。

ラドガ、湖には46種の魚が生息している。漁業者にとり重要な最も多い種は、*Osmerus eperlanus*、*Coregonus albula*、*C.lavaretus*、*Stizostedion luciperca*、*Perca fluviatilis* である。最近15年間の漁獲高は高く、平均5,800トンである。

ラドガ湖は、活発なアマチュアの漁場として格好の湖である。釣人による年間漁獲高は、2,000トンといわれている。

総漁獲高の値により計算された魚の生産は、9kg/haとなっている。

この湖ではアザラシが見られ、マスク・ラットは、この湖岸近くに現れる。

ラドガ湖の水質に大きな注意が払われている。500万都市レニングラードには、ラドガ湖の水が供給されている。1984年、ラドガ湖およびその流域保全の特別措置に関するソ連の大臣評議会の決議案が可決された。約70の研究所の参加による国家計画「ラドガ」が現在準備中である。レニングラードにあるソ連科学アカデミーの陸水学研究所は、この計画の遂行のための調整役として決定された。この計画は、湖の生態系の水質保全と改善に関わるものである。

科学書シリーズと科学や大衆向けの多数の出版物が、ラドガ湖を扱っている。最近の研究論文には“Anthropogenic eutrophication of Ladoga Lake (1982)”、“Nature resources of the large lakes of the USSR and their probable changes (1984)”および“present state of the Ladoga Lake ecosystem (1987)”などがある。

I.M.Raspopov

ソ連レニングラード陸水学研究所

---

## 琵琶湖フォーラム

1989年10月13日から18日にかけて、日本・アジア・アフリカ作家会議の主催による琵琶湖フォーラムが津市で開催された。本フォーラムは、ソ連の作家ラスプーチン氏の提唱したバイカル湖の環境保全運動、すなわち「バイカル運動」の一環として開催されるようになったもので、バイカル湖、セバン湖について今回は第3回目にあたる。

本フォーラムにはソ連からラスプーチン、バラヤン、ペローフ、シードニス、アムリジャーノフ、クルピーン、カルプゲルベーフ民らのソ連を代表する作家やバイカル湖沼学研究所の元所長のガラジー氏などが参加した。さらにモンゴルのバルドルジー氏やアメリカ合衆国のカレンコ・リガン氏なども参加し国際色豊かなフォーラムとなった。日本側からは野間宏、立松和平氏をはじめとする文学者が中心になって会議が運営された。

今回のテーマは自然環境の破壊に対して人間は何をなすべきか、文学は何をなしうるのかであった。琵琶湖研究所でおこなわれた第1セッション「科学と住民運動」は吉良所長の特別講演「琵琶湖の現状」で始まった。その後、これまでよ

く知られていないソ連の湖沼の環境破壊の現状についてガラジー氏らが報告をおこなった。その中では環境破壊が進んで瀕死の状態にある「アラル海」やシベリアの森林破壊についてなど、これまで社会主義の国家では起こらないと言われてきた自然破壊や公害が想像以上に深刻であることがはじめて明かにされた。

第2セッションの「文学と環境問題」では、文学者や科学者といった環境問題に携わる人間が、環境破壊に対して何ができるかについて白熱した議論がなされた。その中では日本の環境を保全することが、逆に第3世界の自然環境を破壊することにつながりはしないかといった、地球的視野からの意見も数多くだされた。結局、フォーラムとしての声明を採択するまでには至らなかったけれども、今後このようなフォーラムを各所で開催し議論を深めてゆくことで意見が一致した。

次回のフォーラムは1990年8月、モンゴルのフブスゴル湖で開催される予定である。

前田 広人

滋賀県琵琶湖研究所

## これからの会議

### 1. ILEC 大阪フォーラム：水を分かちあうために

今、世界は水にどのような目を向けているか

日時： 1990年2月20日(火)午前10時30分～16時30分

会場： 御堂会館(大阪市中央区久太郎町4-1-11)

主催： 財団法人国際湖沼環境委員会

協賛： 国連環境計画(UNEP)、  
国連人間居住センター(HABITAT)

後援： 環境庁、外務省、国連地域開発センター、全国湖沼環境保全対策推進協議会、琵琶湖・淀川環境会議、近畿高度情報化推進協議会、京都府、大阪府、兵庫県、滋賀県、京都市、大阪市、神戸市、(社)関西経済連合会、(社)関西経済同友会、(社)大阪工業会、関西経営者協会、近畿商工会議所連合会

議題：

- (1) 基調講演「国連機関の水環境問題への取り組み」  
S.エフティエフ(UNEP 計画局長)  
中村 恭一(国連広報センター所長代行、  
HABITAT 事務局長代理として)
- (2) パネルディスカッション「開発途上国の水環境問題および先進国の役割」  
コーディネーター 橋本道夫(ILEC 副理事長)  
パネリスト：ILEC 科学委員  
合田 健(ILEC 副理事長)  
C.E.パウアー(WFEO 技術環境委員会名誉会長、  
アルゼンチン)  
S.E.ヨルゲンセン(国際生態モデリング学会事務局長、デンマーク)  
N.B.アイボテレ(水資源研究所所長、ガーナ)  
C.H.D.マガツァ(カリバ湖研究所所長、ガーナ)  
T.N.コシヨ(科学産業研究評議会上席研究員、  
インド)  
劉 鴻亮(中国環境科学研究院院長、中国)  
J.サランキ(バラトン陸水学研究所所長、  
ハンガリー)  
R.A.フォーレンヴァイダー(カナダ内水面センター、カナダ)

### 2. 湖沼環境フォーラム

趣旨： ILEC 科学委員を派遣し、世界の湖沼が抱える環境問題について、講演、討論、視察を通じて、同委員と各県行政官、研究者との交流を図る。

日時： 1990年2月19日(火)～20日(水)

場所： (1) 茨城県土浦市(主催茨城県)  
(2) 長野県長野市(主催長野県)

議題： (1) 講演  
(茨城会場)  
G.N.ゴルベフ(モスクワ大学、前UNEP 計画局長)  
J.G.ツンディシ(サンパウロ大学水資源応用生態学センター所長)  
(長野会場)  
ハインツ・レフラー(ウィーン大学教授)  
ロバート・G・ウエツツェル(アラバマ大学教授)  
(2) フリー・ディスカッション  
(3) 湖上視察(霞ヶ浦、諏訪湖)等

### 3. 第3回「湖沼、河川流域に配慮した水環境資源管理に関する研修セミナー」

主催： ILEC/国連地域開発センター/国連環境計画

会期等： (第1部) 1990年2月12日～17日 琵琶湖研究所  
(第2部) 1990年2月19日～22日 岡崎ニューグランドホテル

---

#### 事務局から

皆様のニュースレターへの投稿をお待ちしております。  
ご意見、湖沼関連の情報などを事務局宛にお送り下さい。  
(このニュースレターには再生紙を使用しております。)

---